

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

The association between constipation and subsequent risk of atopic dermatitis in children: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

子どもの便秘とその後のアトピー性皮膚炎発症リスクとの関連

ユニットセンター(UC)等名: 大阪ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Environmental Health and Preventive Medicine

年: 2023

DOI: 10.1265/ehpm.23-00103

筆頭著者名: 高野 良彦

所属 UC 名: 大阪ユニットセンター

目的:

アトピー性皮膚炎の子どもの腸内細菌叢にはその多様性が失われたディスバイオーシスという状態が報告されており、ディスバイオーシスは便秘にも関連している。乳幼児で便秘とアトピー性皮膚炎との関連を調べた研究はこれまで存在しない。本研究は、幼児における便秘とアトピー性皮膚炎との関連を調べることを目的とした。

方法:

エコチル調査参加者のうち、62,777 人のデータを用いた。1 歳時の排便頻度を質問票により把握し、1 週間に 2 回以下の排便回数を便秘と定義した。国際標準の質問票の回答と、医師によるアトピー性皮膚炎診断のいずれかによりアトピー性皮膚炎を定義し、1.5 歳から 3 歳までのアトピー性皮膚炎の累積発症をアウトカムとした。1 歳時の便秘と 3 歳までのアトピー性皮膚炎発症との関連について多変量解析を行った。

結果:

62,777 人の解析対象者の中で 1.5 歳から 3 歳までにアトピー性皮膚炎を発症したのは 14,188 人だった。1 歳時点で便秘であった子どもは、ほぼ毎日排便する子どもに比べて、3 歳までにアトピー性皮膚炎を発症するオッズ比が 1.18 (95%信頼区間: 1.01-1.38)であった。同様の傾向は 2 歳までの発症と 1.5 歳までの発症についても認められたが、統計学的に有意な差ではなかった。

考察(研究の限界を含める):

本研究で見られた結果について、アトピー性皮膚炎の定義を質問票の回答によるものに限定しても実質的には変わらなかったが、定義を医師によるアトピー性皮膚炎診断によるものに限定した場合には、便秘とアトピー性皮膚炎発症との間に関連は見られなかった。これは、個々の医師によってアトピー性皮膚炎の診断基準が異なることが要因の一つとして考えられた。本研究の限界として、便秘の有病率が過小評価されている可能性が挙げられる。すなわち、国際標準の便秘の診断方法である ROME III で診断した場合の小児の便秘の有病率は 9.5%とされているが、本研究では 1.35%とかなり低値であり、エコチル調査での質問票が ROME III と異なることが原因と考えられる。

結論:

1 歳時の便秘は、3 歳までのアトピー性皮膚炎発症リスクの上昇と関連していた。アトピー性皮膚炎は 3 歳以降にも発症する可能性があるため、今後、3 歳以降での関連を検討する必要があると考えられる。